

方言ネタ

学校で使う言葉にも方言差がある。

例えば「模造紙」。熊本県や佐賀県などの九州の一部は「広用紙ひろようし」という。愛媛県では「とりのご用紙」、新潟県では「タイヨー紙」(表記はいろいろ)、岐阜県や愛知県では「B紙」、富山県は「ガンペ」、とごつごつに様々な言い方がある。学校は地域に根ざしているのだ。

「花曇りの向むか」(瀬尾まじい／一年)は、関西方言の地域に転校してきた、共通語を話す主人公の「僕」が、新しい学校になじめないという設定から始まっている。一人称も、となりの席の「川口君」は「俺」なのに、主人公はなんとなくヨソイキ風の「僕」だ。川口君が声をかけてきてくれるもの、せっかくなの花曇りの話題でも、「ああ。そうなんだ。」というように会話が続かない。会話の仕方には地方差があるし、アクセントなども意識してしまうのだろう。しかし、後半、ちよつとした変化がある。その川口君と偶然

駄菓子屋さんで出会う。しかも「梅干しのお菓子」が共通の好物ということがわかって共に買い求めるのだ。

このときも会話そのものは、「僕も小さいころから食べてた。」「そうなんや。」「うん。そう。」「そっか。」「のよ」に「たごたごしい」。確かに、この「うん。そう。」はあかん。例えば大阪風なら、「ごうで、」いや〜赤ちゃんの時からおっぱい飲む時のツマミが梅干しやってん」などとボケを力マして、「なんでやねん」とツツ」んで買うところだ。

もっとも川口君もおっとりという感じで、「そっか。」「と返事はしてくれている。なんとかツツ」めないかと考えてたのかも(違つか)。おじいちゃんの話をする「川口君」と、おばあちゃんと一緒に朝ご飯を食べる主人公。二人とも「小さな駄菓子屋」の方へ来ているのも合いそつだ。最後の「〜ぼんやりとした花曇りだ。」に続く文が、「で

も、僕が手に提げた小さなふくろの中にはあまずっぱい梅干しがちゃんと」となっている。「きいぢない」という描写と曇りの心象風景に対して、逆接で接続されている。「ちゃんと入っている」というプラス表現的な修飾もある。今度はうまく仲良くなれそうな予感がある。そう、「花曇り」の「向むか」には何かちよつとした変化の兆しがありそう。

「とっかかり」ができないことの描写、最初にも出てくる梅干しのモチーフ、活動的な「ばあちゃん」の描き方と何気に含蓄のある言葉、「花曇り」という「曇り」だが春を思わせる言葉。新学年が始まったころの転入生の気持ち、さりげなく描かれている。「僕」と川口君はいい梅干し友達になれそう。ま、ツツ」ミ三年ボケ八年。慣れるには時間がかかるもの。あ、そつそつ、「模造紙」みたいな方言ネタも実は転校生にはええ話題になるんやで。

早稲田大学教授

森山卓郎もりやまたくろう